

医学教育ニュース (第37号)

特集: 第22回 医学教育ワークショップ

平成24年10月10日 発行

編集 久留米大学医学部教務委員会 広報活動委員会

特集

第22回医学教育ワークショップ実行委員長 神田芳郎 (法医学・人類遺伝学講座)

第22回医学教育ワークショップは、平成24年8月2日(木)から4日(土)までの3日間、唐津ロイヤルホテルで実施されました。医学部各講座、病院各診療科はもとより、看護学科、附属研究所、医学部学生、大学院生の参加者からなる総勢65名により本学医学教育についての、熱い議論がなされました。

今回のワークショップは、テーマ1「チーム基盤型学習(TBL)を用いた医学教育」、テーマ2「成績不振者への対策」、テーマ3「“学生力”を見つめ直す～学生セッション～」、テーマ4「大学院の理念・目的に沿った教育目標の策定」の4つのテーマで、各テーマに分かれてのグループ討論が行われました。

各グループとも、テーマについてKJ法による問題抽出を行い、具体的な提言ができるように討論が始まりました。その後継時的に進捗状況を報告する全体討論が行われ、最終日に提言がまとめられました。今回は、神代副実行委員長のご尽力で、ツイッターやクリッカーを用いたリアルタイムな意見の提示やアンケート調査といった初めての試みが導入されましたが、当初の期待以上の効果が得られたのではないかと思います。

教育講演では、高知大学教育研究部医療学系医学

教育部門、瀬尾 宏美教授をお招きし、「チーム基盤型学習(TBL)を用いた医学教育」をご講演頂き、さらに参加者全員にTBLの演習を行って頂きました。この講演と演習によりTBLのついての理解が深まり、特にテーマ1の議論に大いに活力となりました。

今回の各テーマはそれぞれ様々な難しい課題を含むものでしたが、実行委員会の先生方の開催前

からの綿密な準備はもちろんのこと、ワークショップに参加いただいたメンバーの方々の熱いディスカッションが実を結び、素晴らしい提言がなされました。またテーマ3は医学部学生を中心とした学生セッションという初めての試みでしたが、参加メンバーのご尽力で活発な議論と有意義な成果が上がったものと思います。

今後は、検証方法を含め今回のワークショップで出されたそれぞれの提言を本学の医学教育に具体的に反映させるための努力をしたいと考えております。

最後になりましたが、桑野教務委員長、神代副実行委員長、教務課、庶務課の担当者、それぞれのテーマの取り纏めを快諾頂いた責任者の先生方、参加者の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。



第22回 医学教育ワークショップを終えて

教務委員長 桑野剛一

去る8月2、3、4日に唐津で開催された第22回 医学教育ワークショップ(神田芳郎実行委員長)で議論したテーマは、1. チーム基盤型学習(TBL)を

用いた医学教育(テーマ責任者、高森信三先生) 2. 成績不振者への対策(清川兼輔先生) 3. 学生力を見つめ直す～学生セッション～(武谷三恵先生) 4.

大学院の理念・目的に沿った教育目標の策定（田中永一郎先生）などの四つであった。

今回、チーム基盤型学習（TBL）、および、学生力を見つめ直す等、例年の医学教育ワークショップとは少し趣向が異なったテーマを採択しました。教育効果を上げるためには、カリキュラム、教材、講義法など、実に多くの要素が関与します。今回は、従来の本ワークショップでは、あまり取り上げられなかった「ファカルティ デベロップメント、FD」にフォーカスして、新しい教授法であるチーム基盤型学習（team-based learning, TBL）を体験して、そのメソッドを多角的に議論して頂くことを企画しました。そして、高知大学の瀬尾宏美氏を講師として招き、TBLについての実践を含めた詳細な講演を拝聴しました。私は、非常にその新しい教授法に感銘を受けました。また、クリッカーによるリアルタイムアンケートによると、多くの参加者が講義に取り入れたいと興味を抱いたようでした。

次に、医学科の多数の学生諸君が参加して、「学生力を見つめ直す」に取り組んだ。本学の学生は、非常に真面目でおとなしいとの評価がある。一方で、積極性に欠けるとしばしば指摘される。実際、学外に向けた学生主導の活動は、クラブ活動ほど盛んでない。そこで、学生諸君に自主的・自律的な活動を促し、広い視野をもつ臨床医を育成する目的でこのようなテーマを提案した。準備段階から、学生がどれだけ参加してくれるか心配であったが、幸い当日

は多数の学生諸君が参加し、積極的に自分の意見を披瀝していたことが非常に印象的であった。今回の議論をきっかけに、今後、学生諸君が学内、学外を含めて、積極的な学術的、社会的な活動を展開してくれることを期待したい。

また、成績不振者への対策は、ワークショップの定番的テーマであるが、今回も過去の議論に劣らず、熱心に意見が交わされた。とりわけ、教育支援センター（仮称）設立、および各学年における進級判定基準改訂等の提言があった。

最後に、大学院の理念・目的に沿った教育目標の策定について、多くの大学院関係者の参加を得て、議論が交わされ、本学の博士課程、修士課程における具体的な教育目標の提言がなされた。

以上の四つのテーマの詳細な議論の結果は、医学教育ワークショップ報告をご参照下さい。また、今回、神代教授が全体討論の中でツイッターを利用して、リアルタイムでスクリーンにつぶやきを公開し、一部には本音も見られ、退屈しないワークショップへの工夫がなされた。

最後に、今回のワークショップ開催にあたり、神田芳郎実行委員長、および各実行委員には準備から報告書作成までご尽力頂き、深く感謝致します。また、当日の参加者の皆さんには、ご討議有難うございました。今回の各テーマからの提言を教務委員会で十分に検討し、今後の医学教育の発展ために資致します。

第22回医学教育ワークショップ報告

医学教育ワークショップ～学生力を見つめ直す

石松 秀 （生理学講座 統合自律機能部門、准教授）

隔年で開催される医学教育ワークショップ（WS）が今年も8月2日（木）～4日（土）の2泊3日の日程で唐津ロイヤルホテルで開催された。今回は神代龍吉教授（医学教育学）の発案で「学生セッション」を作ることになり、武谷三恵先生（生理学）がグループリーダーを担当され、星子美智子先生（環境医学）と共に私もお手伝いさせていただいた。従来のWSは、設定されたいくつかのテーマに沿って先生達が討議するのが常で、一部学生が参加することがあっても学生が中心となることはなかった。私は常々「大学の主役は学生だ」と考えているので大変良いことである。私は卒業以来うちの学生たちと付き合い



る中で他大学に大いに誇れる良い面もある一方で、改善した方がよい点もあると感じている。学生セッションを立ち上げるに当たり武谷先生、星子先生と共に学生たちと考えたのは「先生方は学生をどう思っているだろう？」ということだった。そこで学生たちと共にアンケートを作成し実施した。その結果見えたことは、先生は学生を「部活には熱心だがそれ以外のことにも積極的になって欲しい」と見ていて、学生自身は「部活に熱心でも学年が進むと勉強にも力を入れる。積極的な学生は部活以外にもいろいろな活動をしている。」ということだった。WS準備のため5月から毎週のように多くの学生たちと話し合い、WS当日は多くの先生方を交え、学生たちと更にディスカッ

ョンを深めていった。討論を通して久留米大学には色々な先生がいるし学生もいる。そういった個性がお互いにとって良い方向に影響し合えればと思った。少なくともうちには学生のことを真剣に思い議論し、ときには辛口トークも炸裂させ2泊3日缶詰となって議論してくれる先生および教務課職員が

医学教育ワークショップに参加して

臨床研修管理センターの高森信三先生が実行委員長を務められた Team Based Learning(TBL)についてのテーマに参加いたしました。学生にあらかじめ課題をだして予習させ、講義の最初にテストをします。解答用紙を回収後グループに分かれ、グループで討議させて正解を学生に勉強させるシステムです。テストはもちろん、グループで出した解答も成績に反映されますので、最低限必要となる基礎知識も確保され学生の自主性も高まるという理論上「夢のような」教育手法です。

近年、国が全国の大学に求める適正基準が高くなり、研究業績、臨床実績を上げることが基礎系、臨床系を問わず求められています。その中で医学部の助教をはじめとするスタッフは学生教育も兼任し、日々疲弊している実情があること、さらに学生の多くに講義や実習で「参加するだけ」という受身的な姿勢が目立つことから教育スタッフのモチベーションも激減する問題点が浮き彫りとなりました。

特に午前と午後に分かれて行われるテュートリアル(PBL)はPBLスタッフの負担による疲弊と学生の受身姿勢を如実に反映しているようでした。TBLはそれにとって変わるものと期待されましたが、私のグループで一緒になった薬理学の首藤先生や化学の平先生は「大学は正解のない問題に立ち向かう

70人近くいる。学生たちの思いは様々かもしれないが、自分自身で、また仲間と協力して「人として成長する」ことを目指してもらいたい。

山田 圭 (整形外科学講座、講師)

姿勢を学ばせなくてはならない。それを育てるのがPBLである。やり方の問題だ」という熱い意見をぶつけてくれました。TBLでは実現できないPBLの立ち位置というものを改めて考えさせられました。

他大学の医療施設の先生方から「久留米大学出身の先生は患者にやさしい」という評価がありそれは久留米大学学生のいい部分かもしれませんが、しかし医学の獲得すべき知識内容が膨大化する現在、甘やかせるばかりでは医師になる際の「選べる選択肢」を狭くすることにつながる危険性があります。最低限医師となり、そしてさまざまな進路を選べるような位置に居られる学習能力を持たせる必要があります。実際の我々の生粋の後輩である久留米大学の学生を現場で見てそう強く思います。「成績不振者対策」のテーマのグループと共闘するような形で学生の尻を叩きつつ、自ら学んでいく姿勢を身につかせるにはPBLを熱く語ってくれた若い2人の先生の存在は久留米大学の医学教育にまた新たな風を吹き込んでくれそうな希望を感じました。従来の講義のみといった形にこだわらず新しい手法を試行錯誤で取り入れながら模索していきたいと考えています。次世代に向けた新たな問題点と展望を見せてくれた医学教育ワークショップに感謝します。



医学教育ワークショップに参加して

入学から半年も経たない時期に、先生からワークショップへの参加の勧誘を頂きました。テーマは「学生力を見つめ直す」という事でしたが、「学生力」という抽象的なテーマに対して、どのように取り組んでいくべきなのか、と悩みました。しかし生理学教室での準備期間中のミーティングでの、KJ法などを用いた作業を経験するなかで、抽象的なテーマを具体化していく方法を学びました。

佐々木淳 (医学科1年)

まだ入学したての自分には、大きな不満はありませんでしたが、入学してから数ヶ月が経ち、同級生に友人も増え多くの先輩と知り合い、またPBLの先生方や、専門科目への接続を見据えた基礎科学の先生方の丁寧な講義を受ける中で、クラスや大学への愛着が増していきました。そのような中で、なにか一つでもクラスに、医学部での教育環境にプラス

となる様な事を意見できたら、という思いが強まっ
て行きました。

3日間のワークショップでは、多くの先生方と意
見を交える事ができましたし、また先生方が真剣に
議論されている姿を見る事ができました。これだけ
学生について熱意をもって教員の先生が議論を交
わしているのか！という感動は、多くの同級生にも
是非みてもらいたい景色でした。1年生にも、ワー
クショップに興味を持ち、参加を希望する学生はい
ましたが、西医体参加の為に参加できない学生が多

くいました。部活動をやりながら、新たなサークル
活動を立ち上げた同級生や、部活と勉学の両立をし
っかりと行っている彼らが今回のワークショップ
に参加してくれていれば、より有意義な意見がでた
かもしれないと思いました。

これから医学科が、それぞれの個性や、ペース
を尊重しあいながら、助け合えるチームワークと雰
囲気をもてるように、今回体験したこと、学んだ事
を生かしていきたいと思います。

私の教育観

淡河恵津世 (重粒子線がん治療学講座、教授)

「金を残すのは三流、名を残すのは二流、人を残
すのは一流」作者不明の言葉です。教育はその字
の通りに教えるというのですが、医療人を
育てることが、いかに大切で難しいかを考
える毎日の中で、ふと目に留まった名言でした。
人を引き付ける魅力のあるものなかで、ある時
は財力や名声が必要でしょうが、教育というのは
地味なことだと思いますし、人が育つことを喜べ
る人が真の教育者であると思っています。この
人の話を聞きたい、この人と話をしたい、この人
に認めてもらいたい、という「この人」に教育者
がなればいいと思います。

ある程度成長した大人を教育するのは難しく、
大人の教育において最も重要なのは「何をするか」
ということを自主的に行い、その成果をあげるこ
とに目標を定めることだと思います。大学受験ま
での教育のなかでは、進学という目標に進むこと
が評価されるのに対し、大学生から社会人におい
ては自己責任においての成果になります。その中
で医学教育は、やや特殊だと思います。医学教育
の先にあるのは学問としての医師国家試験であり、
人としての道德観や人生観など教育、つまり人道
的価値観の育成も必要になります。そして、医学

生になった時点から、どの過程においても教育は
継続していかなければなりませんし、指導者も若い
医学生や医師から教えられていくものだと思います。

私は、放射線療法に関わっているのですが、日
本において、がん治療の中での放射線療法の占め
る割合は約25%と欧米(約60~65%)に比較して
低いのが現況です。その一方、治療を必要とする
がん患者は増加し、放射線機器はあっても治療医
が少ないというのも現実です。放射線治療医は放
射線物理・生物をはじめ、全身のがん腫に関する
知識を要求される専門医であるため、育っていく
には想定以上の時間がかかると思います。また、
放射線という特殊な物質に関する知識も持たなけ
ればならず、臨床医としての業務以外の知識も要
求される職務だと思います。

私の教育観は、基本にもどって考えることがで
きる柔軟な心を持ち、新しいことに臆することなく、
常に前を向いて共に学習していくことだと思
っています。若い医学生、医師、共に働くパラメ
ディカルの人々と一緒にバランスのとれた医療を
構築してくために、教育は大切であるでしょうし、
また自分も教育されているのだと思います。

◆編集後記◆

唐津で行われた医学教育ワークショップは、65人の先生、事務の皆様参加にて盛況におこなわれました。下記の先生を中心としてそれぞれのテーマについて話し合っただき、様々な活発な討論が行われ無事終了いたしました。

- ◎テーマ1 「チーム基盤型学習(TBL)を用いた医学教育」高森 信三 教授 臨床研修管理センター
- ◎テーマ2 「成績不振者への対策」清川 兼輔 教授 形成外科・顎顔面外科学講座
- ◎テーマ3 「“学生力”を見つめ直す」武谷 三恵 助教 生理学(統合自律機能部門)講座
- ◎テーマ4 「大学院の理念・目的に沿った教育目標の策定」田中 永一郎 教授 生理学(脳・神経機能部門)講座

詳しい内容は医学教育ワークショップ冊子に書かれていますので、そちらを参考にしてください。
医学教育ニュースは久留米大学医学部医学科のホームページにてご覧いただけます。

(http://med.kurume-u.ac.jp/medical_news/index.html)

皆様方のさまざまなご意見等を広報活動委員会まで頂ければ、幸いです。

編集責任者： 井上雅広 inouedna@med.kurume-u.ac.jp (感染医学講座、真核微生物学部門)